

# 広池千九郎博士におけるモラロジーの発想と展開

——『道德科学の論文』を中心として——

大塚真三

## 目次

- はしがき
- 一、発想と発端
  - 二、モラロジーの目的
  - 三、『論文』の組立ての概要
  - 四、第一巻の展開の序説（道德実行についての基本的立場）
    - 道德実行の諸条件—を含む
  - 五、本論の発端（人間生活とは何か）
  - 六、第一の展開（人間存在の成立条件）
    - 七、第二の展開（社会の成立とその維持発展）
    - 八、中間のまとめ（人間進化の法則）
    - 九、第三の展開（現代社会の問題）
    - 一〇、第四の展開（現在までの道德）
    - 一一、第五の展開（諸聖人の道德）
    - 一二、第六の展開（諸聖人の道德の総合。最高道德）
    - 一三、結論（最高道德実行の効果）
    - 一四、『論文』第一巻の理論展開をとらえるための補足メモ

## はしがき

本稿は広池千九郎博士がモラロジー（道德科学）と呼ぶ研究に進んでいった理由や、それがどのように組立てられているかについて、その主著『新科学としてのモラロジー』を確立するための最初の試みとしての道德科学の論文（昭和三年）によって、さぐらうとするものです。同論文は各種の版があり、第二版には「第二版自序文」（昭

和九年脱稿」と「第二版追加文」とが加えられております。二版には字句に多少の訂正がありますが、本文は初版とほとんど変わっていません。その後、分冊の体裁や用字の変更などが行われ、現在は新版(昭和六一年)が行われ、それまでの版はすべて廃版になっております。本稿はその新版によりまして。

## 一、発想と発端

発想の発端について第一緒言第二条に「日本皇室の万世一系の研究にその端緒を発する」(九四ページ。以下ページを略す)と述べてあります。また第一章第四項は「予の道徳科学の研究を思い立てる動機及び理由」という見出しになっていて、そこにも研究を始めた理由があげてあります。このほか各所に研究の動機や目的などが述べてあります。

その一は、中国古代の法制を研究しているうちに、その立法の基礎がローマ法やイギリス法などと同じく正義にあること、および法律の目的が個人の権利を保護することよりも、個人の義務を奨励することにあるのを知った。このことから、後に義務先行説として結晶する概念の意味を味い知り、「私は世界人類の進歩に貢献するために」自分が専門としている法律の研究も必要ではあるが、それよりも、「道徳実行の効果を実証する純科学的研究をしたならば、世界に向って更に大なる貢献となるであろうと考へ付いた」(①本文一八。①は一冊目、以下同様)ということでした。

ここには第一に、自分は世界の人類の進歩に貢献する仕事をしたい、という考へが出ています。

広池博士は当時、東洋法制史の研究をしており、やがて「支那古代親族法の研究」によって学位を得ています。東洋法制史の研究を始めた理由は、たまたま見た穂積陳重博士の論文で、中国古代法の研究はまだ手がつけられ

ておらず、その研究は世界の学界に大きく貢献するであろうことを知ったからです。<sup>(1)</sup> 広池博士は青年のころ故郷の神社で将来は国のために努力し、そのために死ぬようなことがあってもよい、と誓を立てています。<sup>(2)</sup> 国家のために尽したいという志を強く持っていたことがわかります。成長と共に、その志も成長し、世界のためになることをしたい、という考へになっていったようです。<sup>(3)</sup>

ところが中国古代の法律の研究よりも「道徳実行の効果を実証する」研究のほうが、世界に対して、より大きな貢献になると考へついたということです。

義務を奨励することと正義の重要性を感じたことから、すぐ道徳実行の効果の研究の重要性に気付いたという説明には飛躍が感じられます。この場合は逆に道徳実行とは正義を守ることや、正義に従うことと、義務を実行することを意味するという考へであるとすれば、理解できます。

その二。また、当時日本の皇室のみが革命などに遭わず、滅亡せずに存続している理由を明らかにする必要があると言われていた。ところが、伊勢神宮の事業に従事していた関係で、日本の建国について、ひそかに研究を進めているうち、その原因は「その御祖先である天照大神の御聖徳すなわちその最高道徳に基づくものなることを発見して、道徳の権威の偉大なることに驚いて」道徳研究の必要性を深く感じるようになった。と述べています。(①本文一九)

ここにある「道徳の権威の偉大なること」とは、「道徳実行の効果が偉大であること」という意味です。この場合の偉大とは直接には永続を指します。しかし、その他の場合にはもつと意味が広く、「論文」全体を通覧すれば、たちまち明瞭となりますように、人類の平和と進歩、個人の安心と幸福です。

その三。以上の二つのほか、当時盛んになりつつあった労働問題などの社会問題の解決は法律や政治にたよっ

ただけでは望むことが出来ない。どうしても道德によらなければならぬと考えたことなど(①本文二二)、その他いくつかの理由があげられますが、モラロジー研究を始める根本的ファクターはつぎの点にまとめられます。

1、人類のためになることをしたい。

2、それは人類に平和と進歩、個人個人に安心と幸福をもたらす方法を示すことである。(第一緒言第五条、第

二緒言第四条、第五条)

3、その方法はいわゆる道德であるらしい。

4、そこで専門の法律学の研究に区切りをつけ、道德の研究に移った。

5、その研究も、従来のような主観的思考を主にした方法によらず、当時(明治後半)盛んになりつつあった、いわゆる科学的方法によった。

この場合、科学的方法とはどういう方法であるのか、その説明がありません。『論文』の記述の内容から見ると、①関係諸学説の帰納による確認、②社会的諸事実の帰納による確認、③自分をはじめ、関係者の体験(実践的実験)の帰納による確認ということのようです。一口で言えば実証的帰納的研究です。

モラロジー研究の発想と発端とは、おおよそ、このように考えられます。

## 二、モラロジーの目的

モラロジー研究の動機・目的と言うべきことについて、発想と発端という見出しでとらえたわけですが、別に、モラロジーの目的とか性格とかについて直接述べてある箇所があるので、そこを見ることにします。そうすると、

それは、

1、古来人類が実行して来た道德(因襲的道德)の実行の効果を科学的に証明して道德の権威を明らかにすること。

2、古来世界の諸聖人が実行した道德(最高道德)の性質及びその実行の効果を科学的に証明すること。

の二つになります(①本文五七)。これに似ていますが、モラロジーは最高道德を合理的にあきらかにしようとする学問であるという説明もあります(⑦二六)。合理的は科学的と同義であると考えられます。最高道德は聖人が教え、かつ実行して見せた道德(聖人の道德)です。こうした説明を見ますと、モラロジーは普通の道德と聖人の道德との性質、あるいは内容と、それぞれの実行の効果を科学的(実証的、体験的)に明らかに説明することが目的になります。

『道德科学の論文』全二四〇〇ページに及ぶ中で、三〇〇〇ページを超える部分を占める第一巻の見出しは「因襲的道德及び最高道德の原理及び実行に対する科学的考察」です。これは今見てきたモラロジーの目的とまったく同じです。因襲的道德とは普通道德です、「性質あるいは内容」というのは原理に当ります。

モラロジーについてのこのような説明の仕方や考えは広池博士の中に強く定着しているらしく、随所で随時にそれがひらめいています。その結果、モラロジーとは、道德実行の効果を科学的に証明しようとする学問である、というように理解される場合が多くなっています。

これですと、道德は大切なものだということが前提になっている感じがします。従来一般に、道德とは人としてふみ行わねばならぬこと、と考えられています。ところが一方では、何故人は人として道德を行わなければならぬのか、という設問があります。そこで、それに対して、道德が人間にとって必要であり大切である理由を明

らかにしようと言うのがモラロジーの目的だということにもなりません。

しかし、広池博士におけるモラロジーの発想という視点から調べたところによると、すでに明らかになったように、結果としては道徳の必要性、つまり人生にとって道徳がひじょうに役立つこと（効用、効果あること）を明らかにしているが、それは目的ではなく、どこまでも研究の結果の収穫である。モラロジー研究の出発点、あるいは目標（目的）は人類の平和と進歩、個人の安心と幸福を実現する方法を見つけ出すことである。モラロジーはそれを目標として研究している。その結果の結論として、そのためには聖人の道徳が最もよい方法であることが確認された、と考えるのがよいようです。このことは、以下にだんだんはつきりして来ます。

第二版自序文では「人類の真の安心、平和及び幸福の実現に関する原理及び方法が学問的に確定されたのであります」(①本文三四)となっています。第二版の出版はモラロジー研究の成果をもって社会教育活動を始める時期に当たっていますので、その自序文は学術論文として世に問うというより、活動開始の呼びかけという性格が強く感じられますから、確定というような断定的表現になるのでしょう。もし目的が全く達成されたのであるなら、その研究は一応終了です。しかし、第三緒言には「引き続き研究を必要とする諸項目の概要」が32項目あげてあります。それを見ますと、確定したと宣言するには、まだ研究すべきことが沢山残されています。それで、学問的研究としては、とりあえず「見通しがついた」ということだと考えられます。

つぎに、その研究の報告書とも言える『論文』について、その内容がどうなっているか、その要点を、できるだけ大きくつかんでみることにします。

### 三、『論文』組立ての概要

『論文』は第一巻と第二巻にわかれています。つまりモラロジー研究には大きく二つの分野が考えられていることがわかります。

第一巻はすでにふれましたように、「因襲的道德及び最高道徳の原理及び実行に対する科学的考察」です。これによれば第一巻では道徳を因襲的道德と最高道徳とに分けています。因襲的道德は在来の道徳、あるいは普通の道徳という意味です。それに対して、最高道徳は、それに比べてはるかによい道徳、あるいは、広池博士が研究した範囲でもっともよい道徳という意味であると考えられます。『論文』の序文や緒言によれば、それは聖人の道徳です。第一巻の見出しだけでは、そこまでわかりません。しかし、従来の道徳に比べてはるかによい道徳を見つけ出し、それを述べていることが予測できます。前にふれましたように、第一巻は『論文』の約90パーセントの紙数を占めます。紙数で内容を判断するわけにはいきませんが、ひじょうに多くの研究努力がそこにそそがれていると見て良いでしょう。

第二巻は「最高道徳の大綱」です。その内容は、いわゆる格言に当るものの分類的列記です。これは最高道徳の実行についての部分と考えられます。

モラロジーの目的は「人類の平和と進歩、個人の安心と幸福を実現する方法の発見にある」ことをすでに確認したわけですが、学問としては、あるいは研究としてはそれでよいとしても、それは当然、その研究成果を使って「平和と進歩、安心と幸福」を実現するためです。それは単なる学問の分野を超える課題です。広池博士のモラロジー発想の原点には、「人類に役立つことを研究したい」というだけでなく、実際に人類に役立ちたいという

悲願があります。<sup>(6)</sup>

第二緒言第六条に「モラロジー確立の目的は、畢竟、世界の全人類」に「その理解を得、実行をなす人を造り出そうとするにはかならぬので」あるとあります。このことからすると、第二巻の内容はきわめて重要です。第一巻は「その理解を得」るための前段階です。それにしても第二巻の内容はまだまだといった感じですが、その内容に相当することがらは第一巻に相応に充分に各所で述べてあるものの、広池博士の研究の最終テーマである実践篇、つまり第二巻の展開は未完であって残された問題です。

こういうわけで広池博士のモラロジーの理論展開、あるいは『道徳科学の論文』におけるモラロジーの展開を調べるには、第二巻をはずして考えてよいと考えられます。

なお『道徳科学の論文』の組立てについては、現在、絶版になっており、入手し難いので、申しにくいのですが、拙著『道徳科学の論文の理論構造』（開発シリーズ29）昭和四十九初版、広池学園事業部をチャンスがあったら参考にしていただきたいです。

#### 四、第一巻の展開の序説（道徳実行についての基本的立場―道徳実行の諸条件―を含む）

第一巻は15章あります。

第一章は「道徳科学とは何ぞや」という見出しです。そして冒頭に「道徳科学と申すものは、因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質及び内容を比較研究し、且つ併せてその実行の効果を科学的に証明せんとする一つの新科学であります。」と述べてあります。これについてはすでにふれました。つぎに道徳科学にモラロジーという名称をつけたことに関しての語源的な説明があります。また、モラロジーに似た研究をした学者やその研究の内容の

簡単な紹介があり、さらに「予の道徳科学の研究を思い立てる動機及び理由」が述べてあります。この要点もすでに紹介しました。このほか、これもすでにふれた「モラロジーの目的」や、それに続いて「道徳科学と倫理学」との関係、宗教との関係を述べ、モラロジーに隣接する問題との関係を明らかにし、モラロジーの領域を明示しています。

これは一般的に言うところの、いわゆる「まえがき」です。

第二章は「モラロジーと人類生活の完成」となっています。ここでは人生問題の解決法（第一項）、幸福享受の方法（第二項）などを明らかにすることが現在求められているが、それに応え得るものがないと述べ、暗にモラロジーはその求めに応えようとする研究であることを示しています。これもまた「まえがき」に当ります。

これに続く第三項「道徳の実行とその効果」では、道徳を人々にすゝめ、実行させるには、それが人生に意義あること、つまり効果があることを明らかに理解させる必要がある。そして、そのための研究が必要である。と言つてモラロジー研究の意義を説いています。これもまた「まえがき」です。

ところが、そのつぎに「道徳実行上の諸条件」（第二節）という見出しがあります。そこでは道徳を実行して好結果をうるには、少くとも九つの条件が必要であるとして、動機、目的、方法、時代、特別の時（機会）、場所、特別の場所（場合）、量、質をあげ、それぞれに説明を加えています（①九三二）。しかし、時代、特別の時の二つを「時」としてまとめ、場所、特別の場所の二つを「所」としてまとめますので、九つの条件は七つの条件にしてよいようです。説明文もそうなっています。

『論文』には道徳の概念内容を直接述べた箇所が見当りませんので、道徳という言葉が何を意味するのか、判然とせず、理解しにくい場合があります。「人としてふみ行うべき道」というのでは抽象的すぎます。より具体

的には正義とか、義務を行なうとか、中庸とか、博愛とか言うような徳目を守り行なうこと、と考えられますが、しかし、その徳目の実践に当たっても、よい結果を得るには条件があり、その条件を満さなければ、よい結果はえられない。実行者の人生のプラスにならない。道徳はよい結果を得るために行なうのではないかもしれないが、どうせ行なうなら、好結果が得られるように行なうほうがよいではないか。こういう考えが、この条件の提示にはひそんでいます。

これは広池博士の明確な立場です。基本思想です。モラロジーという学問は何が正しいとか、あるいは善とは何か、とかを求めるのではない。人類の平和と進歩、及び安心で幸福な人生を実現するための方法を求めて研究するのである、という発想の具体的あらわれをここに見ることが出来ます。

これは、理論上どんなによいことであるとされても、それを人間の実生活に実践して好結果が得られなければ、そのことを無条件で「よい」と言うわけにはいかないと考えます。この考えをはっきりつかないといふ『論文』の理解の上で、とまどう場合があるでしょう。

これは第二巻の実践論展開の上で特に重要になる思想です。

序説としての第二章には、このほか第四項、第五項、第六項がありますが、どれも道徳実行には諸条件があり、その条件に合せた行動が好結果をもたらす道徳なのだという説明です。

### 五、本論の出発（人間生活とは何か）

『道徳科学の論文』の本論の出発、つまりモラロジーの学問的組立ての出発は「第三章 人類階級の先天的原因」だと考えられます。これは学問的組立ての上での展開の出発点です。

一口で言えば人間のしあわせ(幸福)、もう少し詳しく言えば人類の平和と進歩、個人の安心と幸福。わたくし流に言えば「よりよい生活」の実現にはどうしたらよいか、その方法を見出し、その目的を実現することのために、広池博士がその研究をどこから始めたか、その手順は明らかではありません。しかし、『論文』の組立てから見ると、まず「人間とは何か」の研究が第一歩になっています。あるいは「人生とは何か」と言ったほうがよいかもありません。よりよい生活の方法をさぐる第一歩として、生活とは何か、人間の生活は何によって支えられているのか、または、生活を左右し決定している要因は何か、これを明らかにしようとしているのが「人類階級の先天的原因」です。人生とは人間が生れてから死ぬまでの生活ですから、生活を左右する要因は人生を決定する要因です。それがわかれば、人生をよりよくするには、その要因を、それにふさわしいように使いこなせばよいこととなります。要因を改善すればよいわけです。

このために『論文』は、まず人生の実態をよく見つめること（人生の観察）から論を展開しています。この展開は自然諸科学での研究展開とまったく同じです。

先に、広池博士が道徳の科学的研究と言っているのは実証的帰納的研究という意味だと考えましたが、『論文』の記述の展開を見ると、観察、帰納、実証という手続によっています。この手続をさして科学的と考えているようです。

「人類の階級」という表現を見ると、ともすれば『論文』は階級是認の上に立って研究を進めているのだと、早呑みこみしたくなります。しかし、これは誤りです。

是認とは言うまでもなく是として認めることです。それをよいことだと受け取ることです。『論文』を読み進めれば、まったく明瞭になります。『論文』は現在の人間生活をそのまま「よし」として是認しているのでは

ありません。現実の人々の生活を観察し、その実状を確認しているだけです。そうすると、その生き方にはいろいろな面で相違がある。しかも、ただ相違しているだけでなく、他人の人生（生き方、生活）と自分のそれとを比べて「ああなりたい」とか、「ああなりたくない」とかいう気持がわいてくる。つまり、好ましい人生と好ましくない人生とがある。この違いは承認するとか、是認するとかの問題ではなく、事実として、そうになっているのであって、事実確認の問題です。そして、『論文』では、この事実確認の上に立って、それだけで終るのでなく、よりよい人生へ進む方法を見つけ出そうとし、その事実を作り出している要因つまり原因をさぐり出そうとしています。その研究結果は二つに分けて報告されています。その一が第三章です。その二は第四章で「人類階級の後天的原因」となっています。

しかし、人類階級という語はどうしても誤解を招くでしょう。このため現在では、たとえば「人間存在の成立条件」あるいは「人生の成り立ち」と言っています。<sup>(7)</sup>

『論文』では人生を少しも固定したものと考えていません。だからこそ、人生の改善の方法を探求しています。さらに言えば、その根本には、人間は皆平等である。だのに現実には平等でない。階級（相違）がある。これは何か、神は人間を階級づけて創造されたのではない。その違いは人間の側、人間のこれまでの暮らし方、歩み方にあるのではないか。だから、暮らし方、歩み方を改善して、すべての人が等しく、よりよい人生を歩くようにしたい。その道が必ずあるはずだ。これも『論文』に流れている基本思想の重要な一つです。この思想がないなら、モラロジーという発想も生まれませんでしょう。

今『論文』は、平等に造られた人間が、好ましい人生、あるいは好ましくない人生というように、それぞれが違った人生をたどるのを人間の側の問題として受けとめて出発していると言いましたが、『論文』は、それを現実的、個人的に観察し、そこには個人の責任にのみ帰するわけにいかない要因（原因）があることを明らかにしています。

これが先天的原因です。個人が生まれ出たその時に、すでに、その人の生き方に大きく関係する要因が決まっています。これを先天的原因と言っています。先天的条件と言ってもよいでしょう。原因、要因、条件。言葉はどれでもよいです。

つぎに、人生の歩み方を左右する要因、条件は出生後にもあります。それが「人類階級の後天的原因」です。先天的原因は、いわば個人の力ではどうしようもない運命的なものと言えそうです。しかし、『論文』では、もちろん、まったく決定的要因（条件）があるにしても、それを乗り越え、人生の歩みを変えて、よりよい方向へ導くことの出来る道を発見しています。それが後天的原因と名付けられているものです。

第三章の第一項は、わずかに四行ですが、その中で「人類の階級とは、ただ上下・貧富の階級というようなせまい範囲のものではなくして、人間の賢愚の階級、健康不健康の階級、長命短命の階級、幸不幸の階級等、あらゆる人間の先天的及び後天的における運命を指したものであります」と述べています<sup>(①一〇五)</sup>。これによっても階級とは相違の意味であることがわかります。結論は

第一に自然の影響（第二、三、四項）

第二に社会の影響（第五項）

第三に父母祖先の影響（第六、七項）

となります。これは先天的原因です。

第四に心（精神）の働きと行動（第四章）

これは後天的原因です。これら四つはどれも常に人間の歩みに影響し、人生を左右していますから、現在の用語としては要因あるいは条件というのがよいでしょう。原因は「過去において影響があった」という感じになります。

先天的要因については当時における発生学や人類学、遺伝学、進化論などの、最新の研究成果をたくさん使っています。後天的要因については、心理学の各分野での当時の最新の研究成果、とくに精神物理的並行説や両面説を大きくとり入れています。この二つの説はともに、精神つまり心と身体とが密接な関係にあることを研究しています。これらは今日の心身医学、心療内科などの分野の研究に相当します。

ちなみにモラロジーの社会教育テキストとも言える『モラロジー概説』（昭和57年）では、これらの人生要因を（一）自然の環境、（二）社会的、文化的環境、（三）遺伝と家庭環境、（四）人間各自の精神作用と行為としております。『概説』のジュニア版である『心づかいの指針』（昭和58年）では四番目を「各自の心づかいと行ない」としています。

## 六、第一の展開（人間存在の成立条件）

人生を左右する影響を与える四つの要因のうち、改善が最も手近である第四の要因「人類階級の後天的原因」に限って『論文』は以後の記述を進めています。これは出発点からの第一の展開です。

先天的原因としてまとめられている三つの要因については、それぞれに専門の学問があり、研究が進められています。第四の要因に取り組んでいる学問がないので、『論文』はその分野の学問的研究を専門に開拓しようとしていると理解されます。表現の仕方に違いがありますが、第一章第四項にある「予の道徳科学の研究を思い立

てる動機及び理由」は、このことをよく語っています。

「人類階級の後天的原因」は、すでに述べましたように「心（精神）の働きと身体の働き」です。これは、そのまま人間実生活です。人生、あるいは「人間の歩み」です。毎日の生活です。

第四章に続く第五章のタイトルは「人類の精神的及び物質的生活の根本原理」です。精神的及び物質的生活と言えば人間の実生活そのものです。精神は心と言ってもよく、物質生活は肉体を支えるものですから、身体の働きの源です。精神的及び物質的生活の根本原理とは心の働きと身体の働きの根本原理であり、人間実生活の根本原理、人生の根本原理になります。

ではそれを『論文』はどうとらえているかと言いますと、第五章によると、それは精神作用である。つまり心の働きである。そして、さらに、精神作用は知的方面と道徳的方面とに分けられる。（そして、文面にはあらわれませんが）現実には、知識（知的方面）と道徳（道徳的方面）とは、あたかも別のもののように考えられ、別々に働くように見える。しかし、実は本来一体であって、一体両面の名称である。（①四七二）これを別々と考え、別々に働かせるのは間違いである。しかも実際には別々に働かせている人が多い。このためどちらかに秀いでいても、その真価が発揮できない。すなわち、人生の前進向上に思うほど効果があがらない。と言っています。（四七七）

そこで人生の前進向上、つまり、人類の平和と進歩、個人の安心と幸福の実現、あるいは、よりよい人生実現のためには、知識と道徳を一体として働かせるのがよい。ということになります。

精神作用は心使いです。これで充分意味がわかりますが、実際にはそれを「考え」または「考え方」として受けとると、一層理解しやすく、実行しやすく感じますので、わたくしは、そう理解することにしています。



以上のことについて、第五章はソクラテス、キリスト、シャカ、孔子の教えや、日本の古代思想などはみな「知徳は一体である（一体でなければ人生にとってプラスにならない）」と考えていることを列記しています。そして、第六章では、第二項で人類学的考察と題して、人間と動物の違いの研究を通し、第三項で文明史の立場から、第四項で新しい研究として注目されていた犯罪学の成果をとりいれ、知徳一体である精神作用が人類を前進向上させて来たことを述べています。

## 七、第二の展開（社会の成立とその維持発展）

第一の展開は人間を、いわば個人としてとらえた展開です。第二の展開は人間を集団的、つまり社会的にとらえた展開です。

『論文』の研究テーマはどこまでも「人類の平和と進歩、個人の安心と幸福」であると考えられますが、そのような人生に向って進むには、人生を作り左右する要因のうちの精神作用が知徳一体として働く必要がある。これが第一の展開の結論でした。ところが人間は社会的動物であって、社会の影響を大きく受けます。それを見逃すわけにいきません。しかも、その社会を作っているのは人間です。そこで社会はどのようにして作られ、どのように変遷しているかを知ることによって、社会を今後よりよくして行く道を見出そう、というのが理論的段階だということになります。

これを扱ったのが第七章です。見出しは「本能・知識・道徳・社会の構成・文明の性質及び人類幸福の相互関係に於ける考察」です。

ここでは、人間のすべての行動が本能から出発している。社会を作るのは人間の本能によっているが、成立し係に於ける考察」です。見出しは「本能・知識・道徳・社会の構成・文明の性質及び人類幸福の相互関係に於ける考察」です。ここでは、人間のすべての行動が本能から出発している。社会を作るのは人間の本能によっているが、成立した社会をよりよく維持し、発展させている社会では、それだけでなく、たとえば老人尊敬とか親を大切にし尊敬すると言った風習が発生、発達している。さらに発達した社会では個人的本能をコントロールすること、いわゆる犠牲（第一項）とか適応（第三項）、団体心（第五項）、連帯的思想（第六項）が出て来ていることを明らかにしています。

社会の成立、発展的展開の事実から、逆に社会の発展のためには、つまり、人類の生存・発達、平和と進歩のためには、老人や親、すなわち諸先輩を尊敬することや、犠牲、適応、団体心、連帯思想などが必要であることになりす。そこでこれらを道徳として一括し、その重要性を示唆しています。

これが第二の展開の内容と結論です。

## 八、中間のまとめ（人間進化の法則）

第八章「人類の進化及び退化の法則に関する考察」は、これまでの展開から得られる「まとめ」のような内容になっています。

人間存在（人生）について、それを左右する要因、あるいは条件は四つある。そして、人生の改善に直接役立つ、最も可能な要因は精神作用と行為（心づかいと行動）である。この発見を出発にして、つぎに精神作用と行為とは何かを調べると、それは知徳の働きであって、これが一体となって働くことによって人類は進歩し、文明が築かれてきた。これが第一の展開でした。

ついで人間社会の成立と展開の様子を調べると、それは群居生活をする本能がもとになっているが、知識の発達にともなって社会生活の利点を知るようになった。また、その生活を継続的に維持し、発展させている社会は

道徳生活が発達している。このような社会に住む人々は安心と幸福の度合が高い。こういうことを明らかにしています。これが第二の展開でした。

以上二つの展開から、人類の平和と進歩、個人の安心と幸福のためには、法則性のあることが推測されます。その推測の上に立って学問の世界を眺めると、当時、進化論が発表されていた。そこで進化論の研究成果を取り入れて、これまでの第一と第二の展開を考えると、つぎのようなことがわかった。それを述べたのが第八章です。ダーウィンの進化論によれば、万物が皆同じように進化するのではなく、その生活が進化する道に合った生物が進化し、合わない生物が退化している。この進化する道がいわゆる自然の法則と呼ばれるものである。そうすると、人間もまた生物であるから、進化の道、つまり自然の法則に合わなければ退化滅亡することになる。ところが第二の展開が示すところによれば、人間は社会がなければ生存し得ず、その社会が発展すれば、それだけ人々の生存、すなわち生活が向上している。しかも存続発展している社会は、そのためのいくつもの条件を備えている。その条件は社会が存続し発展するための法則と言える。したがって人間は、生物としては自然の法則に従うと同時に、社会発展の法則・条件に従わなければ生存発展することができない。この二つの法則に従えるかどうかは、第六章、第七章によって見てきたように、人間がその本能、知識、道徳をどう活用するかによってきまるのである(④九七九)。

これがダーウィンの進化論から学びとった要旨であって、第一と第二の展開の結論です。

第八章の後半は人間生活に関わりの深い自然の法則と、人間の社会生活での法則についての簡単な例示というような感じ です。それを平均法、除去の法則、発泡法などの言葉を使って、比喩的に説明しています。これらの説明は、むしろ生活の実践問題を扱う第二巻で述べるのがより適しているように考えられます。

また第十二項では「人類の進化及び退化の法則に関する歴史的考察の概要」を扱っていますが、これは第一巻の最後の章、つまり第十五章の予告篇のようなものです。そちらで扱ってよい内容です。「論文」全体の理論構造の上からは、このように考えられます。しかし何しても三〇〇ページを越す第一巻のことですから、やはりこのように中間のまとめという形をとるのがよいのかもしれない。第八章はちょうど三分の一ぐらいのところの位置しています。

## 九、第三の展開(現代社会の問題)

人間生活(人間存在)と社会の維持展開とが密接な関係にあり、その進歩発達のためには法則性のあることがわかったということをして、現代社会や現代人の生活がどうなっているかを扱うのが第三の展開です。

その結論は第九章上の第一項の最初に出ています。それは、すでに第五章で明らかになったように、人間生活(人生)の根本が道徳と道徳に一致する知識の運用(知徳一体の働き)にあるのだが、現在の社会はこの根本をかえりみず、末節にとらわれ、すべてを政策的、形式的にのみ解決しようとしているということです。

第九章上の見出しは「人類の平和及び幸福享受の方法に関する現代人の思想の誤謬」です。その第一項の見出しが「本末の顛倒」です。

そして、このため政治や法律の実状、帝国主義、軍国主義、あるいは保守主義、社会主義、デモクラシー、革命などを例にあげ、それらがどれも、それだけでは人類の目標である平和と進歩、安心と幸福実現に思ふような効果をあげないことを指摘しています。

ついで第九章下では、「労働問題、小作争議、国家的公共事業・社会事業若くは慈善事業に対する貴族、富豪、

資本家并に地主の方針及び方法の誤謬」と題して、当時の重要な社会問題の解決の為に、道徳が重要であり必要であり、それをぬきにしては、解決できないことを述べています。

これらの問題の多くは今日では重要性が薄れたり、他の問題に転移しています。現在には現在の問題が山積していますから『論文』の後をうけて研究する学徒は、第三の展開として現在の問題に取組む必要があるでしょう。今日の社会的、個人的問題に対して行われている諸方策や考え方も、その中心には必ずや道徳意識の欠如があるに違いありません。

#### 一〇、第四の展開（現在までの道徳）

人生の目的（平和と進歩、安心と幸福、よりよい生活）の実現のために、きわめて重要であり無視出来ない根本である道徳、しかもまた軽視されがちであり、時には無視される場合が多い道徳の現状はどうなっているのか。これにふれるのが第四の展開です。

これは第十章「因襲的若くは普通的道徳」と第十一章「文明進歩の傾向と道徳の質的進歩」です。

第十章は初めに道徳を不道徳、因襲的道徳、最高道徳の三つに分けています。因襲的道徳は別に普通道徳とも呼んでいます。われわれ一般人が普通に行ってきた道徳です。最高道徳は聖人と言われる人々や、それにつぐ偉大な人物が実行した道徳です。不道徳はまったくよくない道徳です。

不道徳は自分勝手な自己中心の考え方、やり方です。普通道徳はよい考え方、やり方ということになっています。しかし、よく調べると、自己保存、自己発達という自己中心の考え（利己的考え）が基本になっています。平常の生活の場合はよいとしても、何かの事にぶつかると、根底にある自分勝手、自己中心の利己的考えが表面に出て来、不道徳と同じようなことになってしまふ。この結果、争いをひき起す。平和と進歩、安心と幸福を実現するには適さない。

第二項でこう述べ、第四項以下第二十七項まで24項目にわたって、現在行われている道徳の根本が自己中心（利己的）であることを列記しています。

第三の展開によって、平和と進歩、安心と幸福という人類の大目的の実現は道徳によらなければならない。それが最も重要な鍵であることをとらえたのですが、現在われわれが持ち合せている道徳をいざ調べてみると、それによっていたのでは、目的の実現がおぼつかない。現在の社会や生活以上に平和と安心を実現できそうもないという結論です。しかし『論文』では、つぎの第十一章で「文明進歩の傾向と道徳の質的進歩」と題して、当時世界的に注目され、平和と幸福実現のために期待されていた世界平和思想と、それにもとづく国際連盟や、今日なお一般に広く強く支持されている人道主義（ヒューマニズム）について検討しています。そして、現在行なわれている道徳（普通道徳）が相当によくなくなって来ていることを確かめています。それでもやはり、その基盤には自己中心主義や利己主義があると結論しています。（第十一章第五項）

「発想と発端」のところで述べましたように、広池博士がはじめに眼をつけた道徳は中国古代の道徳や日本皇室の道徳でした。それは現在の普通道徳とは異った道徳です。

普通道徳は社会生活の維持、発展のための必要から作られました。もちろん、それには、いわゆる聖人と呼ばれる人々の教えが大きく加わっていますが、それが各地に伝わり、時代が移り変わる間に、いろいろに変容し、聖人が教えた本旨が失われたりしています。そこでつぎには、聖人の道徳を直接調べる、という展開になります。

## 一一、第五の展開（諸聖人の道徳）

第五の展開は諸聖人の道徳思想と事跡の研究です。第十二章でソクラテス、イエス・キリスト、シャカ、孔子の四聖人を扱い、第十三章で日本の古代思想と天皇家に伝わる道徳を扱っています。

諸聖人をなぜこの四人にしばったのか、その理由は明らかではありません。これは当時の常識だったようです。『論文』では第十二章第三項が「聖人及び準聖人の資格」となっていて、10箇条の条件が書かれています。この条件は『論文』の中で設定されたものであって、広池博士の見識によるものでしょう。マホメットについては今後の研究課題としています。

ここでは各聖人を列伝式に扱っています。そして、その総合的まとめが「第十四章最高道徳の原理、実質及び内容」です。これは『論文』の理論の展開としては第五の展開です。展開の順序は理論的によくとのつていますが、列伝的個別的な研究の上に立って、それを総合し聖人の道徳（最高道徳）としてまとめる具体的手続のこまかいところが略されています。じつは、それは、ひじょうに重要な部門です。かりに列伝的個別的な研究のデータが同じであっても、それをまとめる人々によって、違う総合体系が出てくる可能性があります。『論文』では学問にとって重要な部分を明らかにできないのが残念です。

第十四章を見ますと随所に、〇〇参照という注記がありますから、総合について配慮していることがわかります。しかし、読者としては、やはり、つかまえていくには、ついでです。

諸聖人の道徳思想と道徳実践についての研究と、その総合とはモラロジーの最大の課題であると言えるでしょう。

## 一二、第六の展開（諸聖人の道徳の総合、最高道徳）

諸聖人の道徳から、その総合である最高道徳への展開は、それだけを主題とする別稿が必要だと思われます。

本稿は『論文』全体の理論展開の流れをたどることにありますが、そうしますと、第十四章の内容は『論文』の理論的展開の結論だと言えます。その内容の要点は、だいたい、つぎようになります。

1、従来の道徳（普通道徳）は自己保存のために生れたのであるが（第四の展開参照）外面は他人の利己心を満足させることになっている。道徳は自分の損失になると考えられている。（⑨三）

2、聖人の道徳（最高道徳）は自分の品性を立派にすることを目的として出発し、自分の過去の過ちや罪悪の埋め合せのために行うのであるとなっているが（⑨四）、立派な品性は自分の生存発達のために最も必要なものであるから、結局聖人の道徳は自分の生存発達に最も役立つ利己な道徳である。それは直接自己の利益を目的とする自己中心的道徳ではないが、結果として自己のためになる道徳である。

これは聖人の道徳の意義の確認です。すでに何回もふれましたように、広池博士のモラロジー発想の出発は人類の平和と進歩、個人の安心と幸福実現の方法を見つけ出すことです。自己の利益と言っても、これより大きな利益はないでしょう。その実現は人間一人一人が立派な人間になること、つまり立派な品性を作ることが必要だという考えです。これが第一項「最高道徳の淵源及び其最高道徳に於ける自己保存の意味」の主旨です。以下の論述は、聖人の道徳実行の焦点がすべて品性完成であることに集中します。このため、ともすれば、時には何のために品性完成をする必要があるのか、などという疑問さえ出てきそうな場合さえあります。これは最終目標を忘れ、一歩手前の目標にとどまる結果です。広池博士の発想と展開を考えればこのことは明白です。つぎは、最

高道德の範囲が述べられていて、

3、最高道德は自然の法則、社会の法則や習慣、精神作用の法則、肉体と精神との関係についての法則、遺伝や人類進化の法則、農・工・商業や経済などの法則を含む。(第二項)

となっています。こうなると、もはや一般の道德の概念のわくを越えます。しかし、この後の記述ではここからの展開は見られません。もっぱら諸聖人の道德を扱っています。

4、最高道德は普通道德実行の上に行なう。つまり形式は従来そのまま、精神を改めれば最高道德になる。(第三項、第四項)

ここで最高道德は形の道德ではなく、精神の道德、わたし流に言いかえれば考え方の道德になります。

5、最高道德の本質である精神の道德の最も重要な項目の第一は正義と慈悲とである。正義と慈悲の精神(考え)に従って行動することである。(第五項)

6、第二番目に重要な精神(考え)は、人格や権利などという、いわゆる基本的人権は主張によって確立されるのではなく、人権確立の努力の積み重ねによって確立されるという考え(精神、心になること)である。

(第六項)

7、第三番目に重要な精神(考え、心)は、①自分の力だけで生きられるのではなく、自然の力によって生かされているのだという考えである。(第七項第三節)②しかし、自分の人生は自分の責任であって、責任を転嫁しても自分の人生の実状は変化しない、という考えである。(第三節)③先ず自分が立派な人間になる(品性を作る)という考えである。(第四節)④自分の苦勞の結果を他人にわけ譲るといふ精神(考え)である。(第六節)⑤秩序尊重の精神(考え)である。(第七節)

第七項には、このほかに「自我を没却すること」や「絶対服従の精神」など、まだ二、三の重要項目があります。

「自我を没却する」は別の一項目として取り出され、現在『モラロジー概説』で「自我没却の原理」となっています。最高道德の主要項目のとりあげ方は、広池博士が社会教育を始めてから、多少変遷があります。<sup>(8)</sup>その様子を見ると、その後、原理と呼ばれる主要項目の選び方や配列の順序について特別に注意しなければならぬ問題はないうです。つまり展開についての順序はあまり重要でないと考えてよさそうです。「論文」ではつぎに

8、絶対神の存在を認む。(第八項)

9、伝統を重んず。(第九項)

10、人間の精神を開発することを究極の目的とする。(第十項)

があります。これまで品性完成が当面の目標となっていましたでしたが、ここになると、「人間の精神の開発」が究極の目的となっています。しかし、やはり最終目標は「人間の平和と進歩、個人の安心と幸福」です。そのためには人間一人一人が立派な人間になるよう(つまり自己の品性完成を目標にして)努力すること、そのためにはまず人々がその心(精神)を開発することである。という展開です。心の開発とは聖人の教えを学ぶことです。

第十一項は「最高道德の実行は自己の救済さるる事に帰着す」です。ここには二つの要点があります。

11、聖人の道德はこれを単に学んだだけでは充分ではない。その心になって生活してこそ価値がある。聖人の教えの心になれた状態を人心救済と言う。(第一節以下)

12、また人心救済されれば、つまり聖人の教えの心(考え方)になれば、人生の最終目的である「安心と幸福」が実現する。(第八節以下)

第十二項以下は第六の展開というより、つぎの章に出てくる第七の展開に属すると考えられます。あるいは、「その他」の付属的諸問題であると考えられます。

### 一三、第七の展開（最高道德実行の効果）

『論文』第一巻の最後の章はまた第一巻での理論展開の最後でもありません。見出しは「最高道德実行の効果に関する考察」です。社会教育の場面では「因果律の原理」とか「道德的因果律の研究」と通称しています。

要旨は、最高道德という名のもとにまとめられた諸聖人の道德を実行すれば、かならずよい結果が実現することの立証です。

ここには出ていませんが、「第一巻の展開の序説」のところで扱った「道德実行上の諸条件」（第二章第三項第二節）は、すでに指摘したように理論の順序からすると、この第七の展開の最初にとりあげるべきでしょう。聖人の教えの実行と言っても、そしてそれは心の道德であり、考え方の問題だと言っても、現実には必ず形にあらわれ行動と結びつかなければなりません。そうする、そのあらわし方、結びつけ方が、またきわめて重大です。その場合、先に出て来た「実行上の諸条件」を考慮し、それが適正でなければ、よい結果をもたらすわけにいきません。これが『論文』の基本の立場です。

つぎによい結果とは何かについての理解が問題です。『論文』でもその記述は必ずしも一貫して明瞭というわけではありません。しかし、これについて一応明確にしておきました。それでも論を進めていく間に、ともすれば失念しますので、その都度確認して来ました。それは「人類の平和と進歩、個人の安心と幸福」です。『論文』は多くの場合「人類の生存発達、安心平和、幸福享受」というような言い方をしています（たとえば⑨九）。これが「よ

い結果」です。さらにその前段階、あるいは前提目標である「立派な品性（最高品性）」や「人心救済されること」などもよい結果です。

一時的に成功することよりは、じよじよに、だんだんに、よりよくなっていくことを『論文』では「よいこと」として扱っています。最高道德を実行するとうして末弘的永久的に幸福が得られるようになることと述べています。（第九項、第十五項）このような道德実行の効果を明らかにするには、効果のとらえ方、つまり研究方法が重要であつて、その方法を誤ると効果が現存していても見えなくなります。一般には個人的にとらえようとしているが、それでは効果を見出せない。モラロジーの研究法は

1、個人については顕著な人物について調査した。

2、その他は主として団体を研究対象にした。

となつています（第一項第二節）。このほか、

3、善悪の標準をきめておかなければならない。

ことをあげています。『論文』では言うまでもなく、聖人の道德を総合的にまとめた最高道德の実行の効を調べているのですから、この点ははっきりしています。

第十五章はその第一項でだいたい以上のようなことを説明し、確認し、第二項で道德実行についてのキリスト教、仏教、儒教の考えや、カントの説、エマーソンの考えや、その他の諸学者の考えを紹介しています。

第三項以下は、いわゆる道德的因果律（道德実行の効果）を考える上でのいろいろな問題点を指摘しながら、道德的因果律の確認の努力をしています。同時に第二巻で扱われるべきだと考えられる実践の心得に関することにふれており、実践上の注意と思われる内容が多くなっています。これは聖人の教え（最高道德）の効果の確認

に欠くことの出来ない問題でもあるので、やむを得ないことでもあります。

こういう状態ですから第十五章の記事を単純明快に理論的に整理するのはむずかしいように感じられます。実証上重要と思われる事例でありながら、第十四章までの中に含まれているものもかなりあります。

第七の展開は充分にその要点をおさえています。その理論体系はいまだ緒に付いたばかりという感じ。『論文』の標題にあるように、まさに「新科学としてのモラロジー」を確立するための最初の試みとしての道徳科学の論文」です。

#### 一四、『論文』第一巻の理論展開をとらえるための補足メモ(各章の役割)

##### I 序説

研究目標の設定。それは人類の平和と進歩、個人の安心と幸福の実現である。

第1章 研究の発想と発端の説明

第2章 研究の見通しと研究の基本的立場の説明

##### II 本論(その一)

人間生活の研究。その結論は「向上のために道徳が必要である」ということである。

第3章 生物学的(物質的肉体的)考察

第4章 心理学的(精神的)考察

第5章 物質的・肉体的、精神的生活(実生活)の根本についての3、4章の結論からの考察

第6章 人類の発達についての人類学的考察

第7章 人類の発達についての社会学的考察

第8章 人類の発達についての進化論的考察

第9章 人間生活の現状についての社会的考察

##### III 本論(その二)

人間実生活を左右する現在の道徳の研究。その結論は「向上のために最高とは言えない」である。

第10章 現在行われている道徳を24に分析した考察

第11章 当時行われていた平和と進歩のための努力(平和思想と人道主義)についての考察

##### IV 本論(その三)

人間実生活の向上のための最高の道徳を求める研究。その結論は諸聖人が教え示した道徳である。

第12章 ソクラテス、イエス・キリスト、シャカ、孔子の道徳思想とその実践の考察

第13章 日本皇室を中心として伝わる道徳思想とその実践の考察

第14章 諸聖人を中心とした道徳思想とその実践の総合(最高道徳の提示)

##### V 結論

聖人の道徳(最高道徳)の実践が人類の実生活に与える効果の検証。それは人類の平和と進歩、個人の安心と幸福の実現に確実絶大な力がある。

第15章 聖人の道徳(最高道徳)実行の効果についての考察

〈注〉

- (1) 『道徳科学の論文』の付録『廣池博士の学問上に於ける経歴』佐藤滋（京城日報理事）編纂。昭和2年。序7ページ。
- (2) 廣池千九郎「履歴」第二号、『廣池千九郎日記』第一卷、三二二ページ
- (3) 『心づかいの指針』七五ページ
- (4) 『モラロジー概説』五ページ
- (5) 『広辞苑』第一版「道徳」の項
- (6) 『心づかいの指針』七七ページ
- (7) 『モラロジー概説』三〇 『心づかいの指針』二ページ
- (8) 『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』昭和5年。『モラロジー概説』昭和57年。『心づかいの指針』昭和50年。